

墨古沢遺跡の年代と自然環境

学習院女子大学
国際文化交流学部 日本文化学科
准教授 工藤 雄一郎

墨古沢遺跡の年代

千葉県では日本列島でも最も多くの後期旧石器時代の環状ブロック群（53 遺跡 71 箇所）が発見されているが、これまでに出土した炭化物を用いて放射性炭素（ ^{14}C ）年代測定が実施された例はほとんどなかった。しかしながら、遺跡の正確な年代を明らかにすることは、後期旧石器時代の人の動きや文化的な変遷、当時の自然環境などを総合的に考えるうえで極めて重要である。また近年では、後期旧石器時代前半という 3 万年前を遡るような古い時期でも、数mgの微量な炭化物があれば年代測定が可能となっている。 ^{14}C 年代を正確な暦の年代に変換する暦年校正曲線も数年おきにアップデートされている。そのため、発掘調査で環状ブロック群に伴う炭化材などが検出されれば、遺跡の正確な形成時期を推定することができる。墨古沢遺跡では、これまで数十点の炭化物を範囲確認調査で採取することができた。

筆者等は、これまで墨古沢遺跡の環状ブロック群とその周囲から出土した 31 点の炭化材の ^{14}C 年代測定を実施した。その結果、年代的なまとまりからみて、以下の 5 つのグループに区分された（図 1）。

- ① 縄文時代以降の攪乱に関係する一群（2 点）
- ② ^{14}C 年代で 25,000～21,000 年代の一群（6 点）
（約 30,500～25,000 年前）
- ③ ^{14}C 年代で 28000～27000 年代の一群（2 点）
（約 31,700～31,000 年前）
- ④ ^{14}C 年代で 30,000～29,000 年代の一群（16 点）
（約 34,000～33,200 年前）
- ⑤ ^{14}C 年代で 31,000 年代より古い一群（5 点）
（約 35,000 年前より古い）

関東地方や中部・東海地方を中心としてこれまでに集成された後期旧石器時代前半期の ^{14}C 年代測定例と比較してみると、以上の 5 グループのうち④の一群が環状ブロック群の形成時期にもっとも近い可能性が高いと考えた。平成 27～29 年度の調査区は完掘せずに石器群を現地に残していることや、炭化材も明確に炭化物集中を形成しているものだけでなく、包含層出土の炭化材が含まれており、複数の ^{14}C 年

代測定結果に年代的なばらつきもある。しかし、環状ブロック群での直接的な ^{14}C 年代測定が行われた事例は極めて少なく、墨古沢遺跡の環状ブロック群の形成時期を絞り込めたことは、今回の調査の極めて大きな成果の一つと言えよう。

墨古沢遺跡の自然環境

約 34,000 年前の墨古沢遺跡周辺の自然環境を知るためには、遺跡の近辺の低地や埋没谷などで花粉分析を行い、植生を復元することが必要である。そのため、遺跡周辺に形成された谷でボーリング調査を実施したが、約 34,000 年前前後の堆積物は失われており、花粉分析を実施することはできなかった。しかし、遺跡出土の炭化材の樹種を調べることによって、断片的ではあるが、遺跡周辺の植生が見えてきた。炭化材の樹種同定の結果は、トウヒ属やヒメバラモミといったマツ科の針葉樹が多く、寒冷気候下で生育する樹種が多かった。サクラ属などの落葉広葉樹の炭化材もみられた。これらのマツ科針葉樹の樹種は現在の千葉県にはもちろん存在しておらず、中部山岳地帯の標高 2000m の山々に分布している。約 34,000 年前は、環境史的にみると最終氷期にあたり、約 24,000 年前頃の最終氷期最寒冷期に向けて、徐々に寒冷化が進んでいく時期にあたる。酒々井町周辺には、寒冷気候を示す針葉樹と、冷温帯性の落葉広葉樹が混じるような針広混交林が広がっていたのだろう。

図 2 は千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館で展示されている約 34,000 年前頃の南関東の風景を復元したイラストである（墨古沢遺跡そのものを復元したものではなく、当該期の南関東平野部での環状ブロック群の形成期の様子をイメージした）。南関東、特に千葉県での 35000 年前～30000 年前前後の古環境を示すデータは多くないが、今後花粉分析等による古環境研究を進めていくなかで、より具体的な自然環境を復元していくことが必要である。

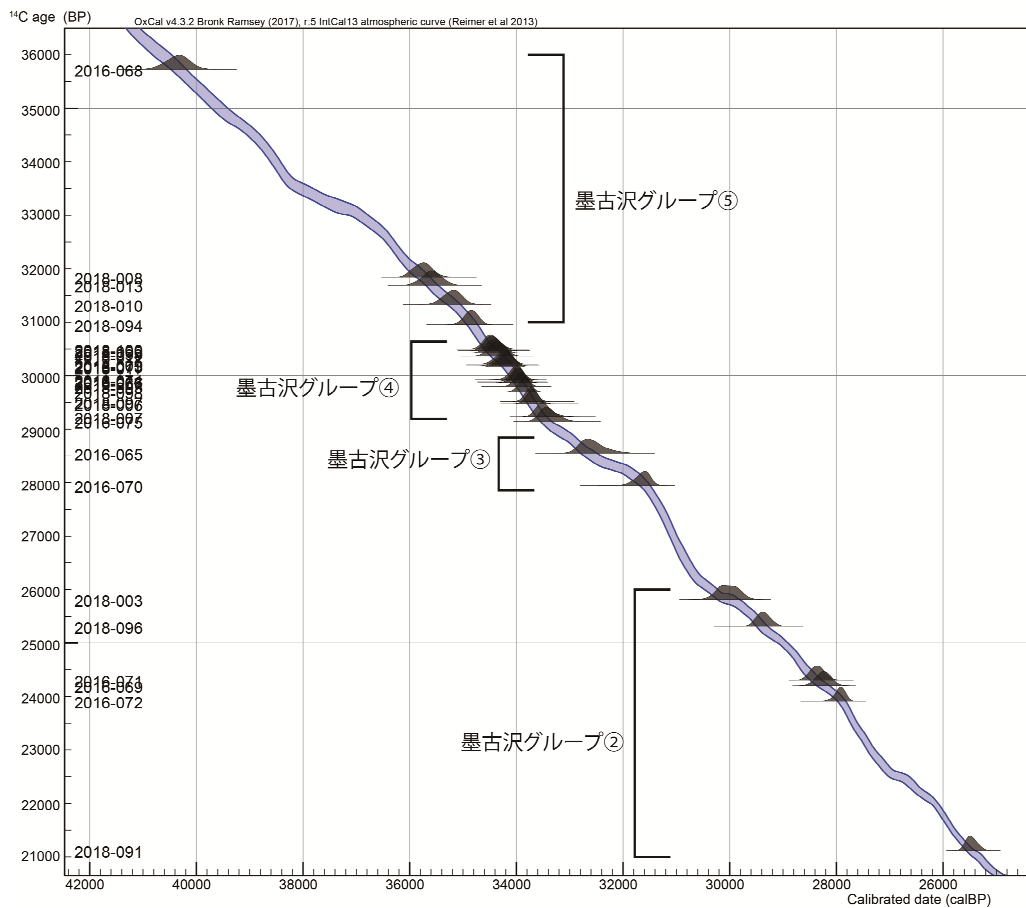


図1 墨古沢遺跡の環状ブロック群とその周辺から出土した炭化材の年代測定結果



図2 墨古沢遺跡の周辺環境をイメージした復元イラスト（石井礼子画，国立歴史民俗博物館）